

日本経済新聞

がん治療、家族のために受ける 養老孟司先生の宗旨変え



東大医学部時代の恩師である養老孟司先生の箱根仙石原（神奈川県箱根町）の別荘で、先日雑誌の対談をしました。山裾に広がるすすきの草原がステキでした。

既に連載で触れたように、先生の「小細胞肺がん」は再発していて、抗がん剤と免疫チェックポイント阻害剤による「標準治療」を受けています。

もともと医療や病院とは距離を置き、「抗がん剤などまっぴらご免」と言っていた先生が宗旨変えした理由を聞くと「愛する家族のために、天涯孤独なら治療を受けなかった」と言われ、とても印象的でした。

小細胞肺がんは抗がん剤が有効であることも理由の一つに違いありません。先生は 87 歳にして、新しい体験から考えや態度を変えていく柔軟性をお持ちなのでしょう。

自分はどうなってもよいが、家族のために治療を受ける、という患者は少なくありません。養老先生も「死は自分のものではない」と言われます。自分の死は生きている者にしか影響を与えません。「二人称の死」が本当の意味での死だと言えます。

別荘では奥様にもお目にかかりました。今回のがん罹患（りかん）経験を糧に、養老先生もご家族もさらに成長されたように感じました。

ドン・キホーテの創業者の安田隆夫氏（76）が現在、小細胞肺がんで闘病中だと週刊誌で公表しています。養老先生と異なり、東大病院で治療してはおりませんが、私も複数回ご相談を受けたことがあります。

安田氏は「驚安の殿堂ドン・キホーテ」の創業者で、一代で年間売り上げ 2 兆円の巨大企業を築き上げた人物です。安田氏は週刊誌の取材で次のように述べています。

「現在、私は最末期とも言えるがんを患っています」「進行と転移のスピードが速く、5 年後の生存率は 2%かそれ以下だというんです。青天の霹靂（へきれき）でした」

肺がんは、小細胞がんとそれ以外の非小細胞がんに大きく分けられます。小細胞がんは肺がんの 1 割程度を占め、安田氏が述べたように悪性度が高く、ステージ 1 でも 5 年生存率は 5 割、ステージ 2 で 3 割程度です。非小細胞肺がんのステージ 1、ステージ 2 の 5 年生存率はそれぞれ 8 割、5 割くらいですから、小細胞肺がんの治りにくさが分かります。

膵臓（すいぞう）がんもステージ 1、ステージ 2 の 5 年生存率はそれぞれ 5~6 割、2 割程度で、小細胞肺がんと同様手ごわいがんの代表です。私がかねてこれらの難治性のがんに備えるための生命保険が必要だと考えていました。次回も難治性がんへのリスクヘッジについて考えてみます。

2025 年 10 月 8 日